Muse

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

帝国データバンク史料館だより
［ミューズ］
2018.2
Vol.31

Muse Talk

ミューズトーク

産地と歩んだ70年

組合の使命、産地を維持するということ

本場奄美大島紬協同組合理事長　山田 伸一郎さん

日本アーカイブズ学会登録アーキビスト　松崎 裕子

アーカイブズ探訪記 第2回 清水建設株式会社

《逸品解題》越後三条打刃物、熊野筆、伊万里・有田焼

Muse Talk
ミューズトーク

産地と歩んだ70年
組合の使命、産地を維持するということ
本場奄美大島紬協同組合理事長　山田 伸一郎さん

山田 伸一郎さん
1950年、本場奄美大島紬協同組合・購買課。2010〜11年専務理事を経て2012年理事長に就任。
半世紀以上にわたり、産地の維持・発展に貢献。

■ゼロからの出発「本場奄美大島紬」が誕生するまで

組合が発足して117年。私が組合に入ったのは1950(昭和25)年です。約70年にわたり大島紬に関わってきました。

戦争中は大島紬の生産はほぼストップしていました。敗戦の年はゼロです。奄美は地上戦がなかっただけで空襲は受けており、周囲は焼けて何一つありませんでした。43年ぐらいまでは相当な生産量を誇っていましたが、戦後どんどん少なくなっていきます。戦中に仕込んだ原料を細々と整理したためです。

とうとう原料がなくなったので、対日援助資金であるガリオア・エロア資金を導入しようということになりました。大島運輸株式会社(現マルエーフェリー株式会社)創業者の有村治峯さんと8代目の組合長久保井米栄さん、奄美群島副知事の笠井純一さんの3人がGHQの司令部に乗り込んで交渉を行い、やっとの思いで導入しました。50年にその資金で練り糸などの原料を購入して機屋に配給することになり、そのために私が組合に入りました。ですから、この御三方は私の就職の恩人です。

44年から46年までは統制経済でした。奄美で作る紬が「本場大島紬」で、台湾で奄美の人が作った紬は「高砂紬」という商標でマーケットに出ていました。しかし、46年7月からは完全に米軍の統治下です。奄美の住民が本土に集団疎開したときに、織機や原料、織口、商標などを鹿児島へ持っていき、終戦後「本場大島紬」として出しました。

奄美では51年から大島紬を再び製品化しましたが、鹿児島で「本場大島紬」の商標を使っているため軍政官に申し出たところ、商標権侵害だから国際司法裁判所に訴えなさいとの回答でした。身内同士ですから国際裁判はいかがなものかと苦労しまして、協議の上創業以来の旗印の商標を鹿児島に譲り、奄美で新しい商標を作ったのがいまの地球印です。52年には「本場奄美大島紬」と改称し、日本復帰後の54年に特許庁に申請して商標権を確実にしました。

51年以降は新しい原料で紬をどんどん作り、日本復帰以降室町や東京の日本橋から問屋が自由に往来できるようになりました。問屋筋が図案師から買い上げた原図を奄美の各機屋に発注して、それを全反買い上げるシステムでしたので年々売り上げが伸びました。

特に昭和30年代から反数が増えだしたのは、色大島の開発があったからです。戦前の紬は泥染めですから、黒か藍、茶色など暗い感じでしたが、県の染色指導所（現大島紬技術指導センター）で色大島や白大島が開発され、自由に着色できるようになりました。商品が試作されると、若年層の需要が喚起されて反数がぐんと伸び、マーケットが非常に広くなりました。

■闘いの日々 組合の財政再建

組合に入っていちばん苦労したのは日本復帰前後です。１９５２（昭和27）年ごろにはＬＣ（信用状）を組んで本土の問屋筋から好みの柄を買い取りました。売れ残った紬を担保にして銀行からお金を借りてつなぎ資金としていましたが、その担保が２万反ぐらいあり、銀行からもこれ以上は借りられなくなったので、鹿児島出張所を設置して全国に向けて紬の販売を行いました。１万反ぐらいは売れましたが、残品は借りた金額以下で処分することになり、銀行への赤字分は組合が弁償したので大損害でした。

大島紬製造工程のひとつ　泥染め

また、ガリオア・エロア資金の返済がありました。当初は対日援助として頂いたものと考えられていましたが、日本復帰した際に債権債務の日米間の取引がありました。日本円が1ドル３６０円、奄美のＢ円（Ｂ型軍票）では１２０円でしたので、借金が３倍に換算されました。日本政府が債務を全部肩代わりし、返済義務が発生しました。日米間の交渉によってＢ円を60円にまけてもらいレートが確定しましたが、その前に糸を買った人からは60円の差額分を返せという業者大会がありました。相手は組合員ですから蹴るわけにもいかず、要求をのみました。

54年ごろから、ストックの赤字とガリオアの債務返済、業者への返金などに非常に苦労して、決着がついたのが78年です。二十数年かかってやっと全額返済しました。解放されましたね。

昭和50年代になって組合の財政は安定しましたが、今度は逆に生産反数が落ち、業界の方が下降線になってきました。組合の借入金は膨大なもので、赤字経営が続いていました。そこへ組合のメーンバンクである商工中金から借入金の返済の請求が来たので、事務所を売却して全額返済しました。また、不良債権を取り立てるのが我々の仕事になりました。協力いただけない人には強制執行などの手段もとって、何とか倒産を免れました。国の政策金融や、市や県の制度資金を組合が借りて機屋にお貸しする転貸事業が、現在の不良債権の元手になっております。売り上げが少ないために簡単には返済できず、ストックが残っているのが実情です。

定年で退職後、なかなか厳しい時期に掃除係として復帰しました。「山田は借金取りばっかりして、弁護士に言うたら、借金を取りに来る」と言われますが、「僕の借金じゃなくて、それは組合の借金だから、組合を恨んでくれよ、僕を恨むなよ」と笑っております。

■産地と売り手のはざまで 産地活性化を目指して

過去5年間を見ますと10％ぐらいの減産です。対策として生産反数や工賃を倍にしようという産地活性化の5カ年計画を立てました。今年で2年目ですが、すでに厳しい状況で、残り期間で挽回するのはハードルが高過ぎるというのが現場の意見です。いちばんの原因は、需要が少ないこと。それから、価格の問題です。いままでは売れ残り品のリスクは全部問屋が持っていました。デッドストックの半分程度の代価を、売れる商品にオンしないことには、問屋が潰れてしまう。売れる商品で補填しようとした結果が原価と売価の差額です。

5カ年計画では、1ロットを16反から4反ぐらいにする話も出ています。問屋は4反ならば何とか対応できる。しかし、機屋側からすると生産コストが2倍、3倍にもなる。問屋の感覚と機屋の感覚に非常にずれがあり、企業は利益を出さなければなりませんから、すぐに解決策は出せません。産地を維持していくのは難しい。伝統工芸品産地の多くは、いずこも同じような悩みを抱えているわけですね。

■直面する課題 職工の高齢化と後継者育成

産地の課題のひとつに職工の高齢化があります。これまで締機を扱うのは60歳ぐらいが限度でしたが、１９６５（昭和40）年ごろにコンプレッサーが導入されたので、70歳でも80歳でもできるようになりました。このように締機は改良されましたが、織りの改良のめどは立っていません。織りでも動力を応用できれば、改善の余地があるのではないでしょうか。

養成所で機を織る研究生

また、後継者の育成も問題です。紬会館に本場奄美大島紬技術専門学院（養成所）があります。1年の養成期間では技術の習得が難しいので、修了後独立までの期間は研究生として場所代も頂いています。原料や織工賃は各機屋から支給されますが、織工賃だけでは生活できません。これではなかなか後継者の育成にはつながらない。もう少し売り上げが伸びれば賃金も上がっていきますが、見返りが少ないのが現状です。売り手の側がもう一度元気を出して売り上げを伸ばしてくれれば、それに続いて組合も産地を応援することができます。

アーカイブズ探訪記 第2回 清水建設株式会社

「ものづくりの伝承と挑戦を支えるアーカイブズ」

会社にとって重要な文書記録（紙・デジタル）やモノ資料を体系立てて整理し、必要な手当てを行って劣化を防ぎ、その真正性・信頼性といった特性を維持しながら、さまざまな利用者に資料を提供するアーカイブズ機能を持つ企業が増えつつある。企業アーカイブズとは、創業以来今日にいたる経営と事業に関する記録資料（本稿では文書記録とモノ資料を指す）の集合体であり、この集合体と記憶を未来に伝える仕組みでもある。

松崎 裕子 日本アーカイブズ学会登録アーキビスト

近代日本の建築を主導 社会的まなざしの転換を目指して

「アーカイブズ探訪記」第2回は、江戸時代の文化元年（1804年）に大工棟梁・清水喜助（初代）が清水屋として創業した清水建設株式会社のアーカイブズを紹介する。

今回お話をうかがったのは、同社コーポレート・コミュニケーション部コーポレートアーカイブグループの畑田尚子さんである。畑田さんは、2003（平成15）年11月に刊行した創業200年を記念する社史（『清水建設二百年 経営編』、『清水建設二百年 生産編』、『清水建設二百年 作品編』、『棟梁から総合建設業へ：清水建設二〇〇年の歴史』）編纂と、この編纂事業から生まれた同社のアーカイブズの整備に取り組み、新たにシミズ・アーカイブズを構築した。

清水建設は江戸時代末期以来、日本の建設産業史において常に先頭を走ってきた。創業者である初代清水喜助が富山から江戸に出て大工店を開業したのが1804（文化元）年、この年を創業元年とし、清水建設は今年創業214年を迎えた。初代と二代のふたりの清水喜助時代は、個人店のような形で商いを行ってきた。81（明治14）年、三代清水満之助の時代になり、清水は設計施工体制を確立したほか、技術と経営の分野を分離してそれぞれに責任者を置き、会計帳簿を改良し、あるいは辰野金吾らと一緒に、他の請負業者にさきがけて工事請負契約書を作るなど、合理化・近代化を図って土木建築請負業者へと経営を発展させた。

三代満之助の長男喜三郎は8歳で四代清水満之助を襲名した。このとき相談役に迎えられた渋沢栄一の助言で支配人に就任した原林之助は、大林芳五郎氏（大林組創業者）や竹中藤右衛門氏（竹中工務店十四代当主）ら、各社のトップたちと協力しながら、建設業界全体の近代化を進めた。なぜか？　殖産興業を進める明治日本の中で、新しい技術を取り入れ大規模な公的施設の建設に貢献していたにもかかわらず、当時の大工業・建設業は社会的な評価が低い業界だったからである。このようなまなざしをはね返し、社会的に認められるためには、業界内のモラルの向上、技術の向上、そして規則や契約の整備といったものが必要だったのである。

その後大正から昭和にかけて近代的土木建築請負業者から総合建設業へ、さらに平成にはスーパーゼネコンとして、建築・土木事業から、不動産開発事業、エンジニアリング事業など事業領域を拡大し発展した。1937（昭和12）年に株式会社化し、66年に第七代社長に就任した吉川清一以後、非同族経営者が代々経営を指揮している。

シミズ・アーカイブズの始まり 二百年史編纂PTの資料収集と整理

清水建設は過去4回にわたり社史を発行してきた。『清水建設百五十年』（1953年11月発行）、『清水建設百七十年』（1973年4月発行）、『清水建設百八十年』（1984年6月発行）、そして前述の二百年史（2003年11月発行）である。シミズ・アーカイブズの立ち上げにつながった二百年史は、1997（平成9）年から98年にかけて準備室が設置され、2名ほどのスタッフがこつこつ準備作業を進めた。この準備室は2000年初頭、正式に社長直轄の「社史編纂室」と定められた。畑田さんは、このプロジェクト室の正式な発足と同時に、20年以上所属してきた人事部から異動して、プロジェクト・メンバーに加わったのだが、このときの畑田さんの心境は、歴史に全く関心がなかったことから「嫌々異動してきた」ものであったという。

二百年史編纂のために収集した資料の総数は一万数千点。収集のための働きかけとして、まずはOBに広く声をかけた。建設事業に携わる関係者は建物に対して思い入れがあることから、さまざまな記録や写真を個人で大切に保存しているケースが非常に多いという。その種類は竣工記念帳や技術資料、工事概要書、社内教育・研修教材、また、個人に帰属する辞令や給与明細、日誌など多岐にわたり、そのほとんどの資料がオリジナル（原本）で保存状態も良好なまま編纂プロジェクト・チームに集められた。これを編纂チームでは5分類（業務記録、建物記録、社史記録、儀式・伝統、記念・希少物）して、編纂作業を進めた。畑田さんはこの5分類による整理に着手した段階をシミズ・アーカイブズの出発点と捉えている。

二百年史が無事刊行された後の04年にプロジェクト・チームは解散し（編纂室には多いときには7～8名が所属）、畑田さんを含め2名が残務整理のために残ったが、その後1年ほどしてもうひとりのスタッフが辞め、以後畑田さんひとりきりという状態が続く。組織的にも、情報システム部への編入を皮切りに、総務部、法務部、総合企画部、そして現在所属するコーポレート・コミュニケーション部へと、社内を転々とした。いまから3年前に将来を見越して

1名のスタッフが加わるまで、約10年間畑田さんはひとりで、二百年史編纂のために収集した資料、それ以前の集積資料、さらに二百年史編纂以降に他部署から移管される資料や寄贈された資料の整理とデータベース化、資料の多角的な活用に取り組むことになった。

データベースこそいのち 記録資料の文脈を見つけ出す

この過程で二百年史編纂時の5分類を見直し、「社史資料」(経営事項や通示達、取締役会などの意思決定文書、社報等印刷資料ほか)、「OB資料」(個人資料、工事関連資料ほか)、「年史資料」(社史編纂記録、ヒアリング記録ほか)、「人物資料」(創業家、経営幹部、社員、外部の建築家・設計者など)、「実績資料」(技術資料や工事案件ファイルなど)、「図書・古書類」、「写真・アルバム」、「社宝・もの」という8分類に編成し直している。中でも所蔵点数が多いのは、「社史資料」「OB資料」「写真・アルバム」である。

シミズ・アーカイブズの特色ともいえる「OB資料」の場合、整理の仕方は、内容によって「社史資料」「実績資料」「写真・アルバム」などにバラバラに分けることはせず、寄贈者をひとつの単位としてボックスを作って管理している。

史資料は、日常的に使用頻度が高いものを執務室内に集中して保管し、貴重史料や写真など温・湿度を考慮する資料については別館や外部倉庫などに保存するなど、分散して管理している。しかし、これらは全てデータベース化してあり、配架収納場所とタイトル、そして内容についても細かく登録し、検索によってスムーズに取り出し、利用できるようになっている。

このひとりきりでのアーカイブズの整理とはどんなものであったのか。

畑田さんによると、一つひとつの資料に含まれるさまざまな情報をタイトル、書かれている内容の概要、工事名や関与する人物名、資料の作成年や発行年、作成部署(社内もあれば、例えば日本建築学会という外部の組織の場合もある)、資料形態(写真・図面・書籍・レポートなど)の種別に分類表記し、これら全ての情報をエクセルのデータベースに登録、どの項目でも検索しやすいように構成されている。

「資料を読み込んで、そこから何が大事かということを読み取ります。そして、それをきちんとデータベースに反映する。正確な情報と必要な情報を反映したデータベースはいのちです」(畑田さん)

「こういった資料の整理は派遣社員や契約社員に任せればいい、外注すればいいという考え方もありますが、私は違うと思います。アーカイブズを担当する人間が記録資料を読み込み、理解をして、データベースを蓄積していくことがアーカイブズ業務の基本であり、土台をつくる仕事だと思っています。資料を読み込むことで、資料と資料のつながりが見えてもくるし、理解の幅、奥行きが深くなってもくる。こうした積み重ねこそがアーキビストにとって最大の財産になるものと経験から学びました」(同右)

アーカイブズ学では、記録資料とは内容(コンテンツ)と文脈(コンテクスト)を持つものである、と叩き込まれる。個々の記録資料は、それぞれが作成された文脈を持っている。例えば昭和○○年度の○○部○○課のプロジェクトに関する一連のファイルの中のたった一枚の文書も、それだけではただの紙切れであるが、そのファイル全体を見てみると、実はプロジェクトの方向が転換した重要な会合に関する記録かもしれない。さらに、その年の取締役会議事録や財務関係資料などと突き合わせれば、会社全体の動きを知るための重要な記録である可能性もある。

シミズ・アーカイブズの資料集積は、社内、外と広範囲から収集を図っているため、それぞれに独立した資料の相互の関係(文脈・コンテクスト)を発見し、理解するためには、やはり資料自体を読み込んで全体の体系と分類を考えていくことが必要不可欠である。

現在も、OBやそのご遺族、また、関係先の企業や取引業者、お得意先からも資料の寄贈は多い。シミズ・アーカイブズを構築していく上での基本的な考え方は、紙きれ一枚の簡単なメモでも捨てずに、データベースに収録し保管をする。いまその場では大した情報ではないと思うことでも、何年か後には、歴史的評価が変わり、大切な意味を持つ資料となることもあるからである。歴史的事実に対する見方や評価は、おのずと時間軸が伴うものであることも社史編纂の経験を通して学んだ貴重な視点であったという。

経年資料と呼んでいる経営事項や業績、組織、役員、人事関係のデータはイントラネットに掲載されたものを紙にプリントアウトしてファイルするとともに、情報はデータベースに登録する流れができている。CADで作成された設計図、あるいは施工図といったものは現在全てデジタル情報となっており、これらは情報資料センターという別組織が現用資料として管理している。

記録資料で伝承と挑戦の歴史を実証 活用を通じて未来につなげる

建設会社は一品生産であり、手元に残るものは記録資料のみである。

「たくさんの建物をつくってきましたけど、つくったもので自分の所で持っているものはほとんどありません。唯一残るのが資料なのです。建物も永久に残るものではないですから、記録資料というものが最後の最後に残る、その時代の建物、ものづくりの歴史を実証する貴重な資料です。だからこそ大事なんですね」(畑田さん)

シミズ・アーカイブズの記録資料を体系化し、データベースを構築するため資料を読み込む中で、「嫌々異動してきた」畑田さんはさまざまな発見に導かれた。先輩が残してくれた記録資料は決して過去のものではなく、現状から未来に向けて考えるための礎であること。そして、資料と向き合う中で、先輩たちの情熱を伝えなければいけないという思いを深め、伝えるためにはこれらを活用することが必要であること。

そこで最初に取り組んだのが社内報(A4判、紙媒体で毎月発行)にシミズ・アーカイブズの資料を用いた記事を掲載することだった。すると、社内報への記事掲載がきっかけになり、資料の活用の場が広がっていった。まずさまざ

まな問い合わせがあった。さらに社員教育のための研修会での講師依頼も舞い込むようになった。

社内にはいろいろな研修がある。例えばその中のひとつに入社して5～6年目の工事主任向けの研修があり、年間5～6回開催されている。畑田さんは2008(平成20)年からこの研修会の中で「清水のものづくり」の歴史講座を担当している。工事主任というのは工事長になる手前の段階で、これからより責任を背負って現場の第一線に立つ人たちである。彼らに向けて、清水建設と縁の深い渋沢栄一の「論語と算盤」という経営の基本理念がどのように会社の中で守られ、いまに生きているのか、といったことを語っている。経営理念の根幹を支える「顧客第一」や「定用工事の大切さ」も渋沢栄一や創業者清水喜助から教えられ、先輩たちはこれを真摯に実践してきたという大切な歴史があるが、この研修を導入する以前には、清水の歴史は体系的には教えられてこなかったという。

ものづくりの歴史に関する研修会は工事主任向けのものだけでなく、各事業部門での研修会にも広まっていった。エリア(支店)研修の場合は、九州であれば最初に九州地区で始めた工事は何か、その後どのように展開して、どのような仕事をやっていたのか、そういったことを畑田さん自身が資料から学びつつ語ってきた。お得意先との間の長い歴史や、そこでの失敗なども研修プログラムの中に必ずひとつは入れるようにしているという。

畑田さん自身は成功体験よりは失敗に学ぶ方が重要と考えている。経営の苦しかった時代にトップは何を考え、どう舵取りをしてきたのか、そのとき社員は何をしてきたのか、あるいは常日頃の丁寧な仕事ぶりからお得意先が助けてくれたことなど、たくさんの話がアーカイブズには眠っている。お得意先に対して誠実に質の良い丁寧な仕事をし、その仕事に見合った適正な利益をいただくという、渋沢栄一の「論語と算盤」の教えは清水の風土、文化に脈々と流れ、継承されてきたものだという。

社内研修はさらに社外へ、例えば「シミズ・アーカイブズ」の構築やその活用について大学や設計事務所などからの講演依頼などにも広がっていった。

このように、資料収集、整理、データベース化を経て活用に携わる中で、資料整理というのは活用、使うための資料整理であり、根幹はアーカイブズ業務を担当するスタッフがきちんと資料について理解している必要があることがますます明らかになる。「ただ検索をしてすぐに出してきて、はい(どうぞ)、というのとは違うと思う」と畑田さんが言う通り、アーカイブズの担当者は単なるデータ入力者でもなければ、検索代行者でもない。資料の内容と相互のつながり(文脈)を熟知してこそ、多様な用途に役立てることができるのだ。

持続可能なアーカイブズ構築のためにさらなる活用、デジタル資料整理、そして人材の育成

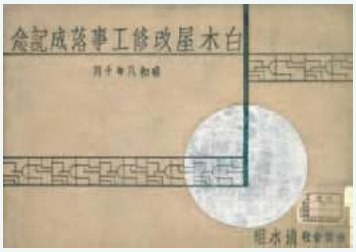
社内報から始まった社員教育や研修会での資料の活用によって、シミズ・アーカイブズは二百年史編纂終了から14年を経た現在、伝承と挑戦を伝えるツールとして、「歴史のことだったらここに聞けばいい」と社内になくてはならないものとして浸透している。さまざまなレファレンス(問い合わせ)に「間違いなく答える」ことを心掛けてきた成果ともいえる。

そして現在、近代日本の建設の歴史を伝えるシミズ・アーカイブズには次のような課題があるという。ひとつは展示や出版を通じたさらなる公開、もうひとつは、近年ほとんどの文書がデジタルで作成されるようになっていることから、現物資料中心の現在のシミズ・アーカイブズと最近のデジタル記録資料とをどのようにつなげ、保存管理をしていくのか、という問題だ。デジタルで作成された資料の管理には未知の部分が多く、方向性を定めることが困難である。さらに、アーカイブズを持続可能なものとするための体制づくり、という重要課題がある。それは、アーカイブズの持つ価値を深く理解し伝えることのできる、専門的な人材を中心にしたアーカイブズの維持管理体制、ともいえる。中でも専門性を持った後継者の養成が重要なポイントである。「この仕事は幅広い。全方位的」と畑田さんが語っているように、全社的、さらに社外のステークホルダー(顧客、取引先、株主、地域社会の人々、あるいは研究者や学生など)とのコミュニケーションも欠かせない。

最後に筆者の感想を一言添えたい。企業組織のあり方はさまざまで、それぞれ個性があり独自の企業文化を持っている。このことは、企業アーカイブズのありようも、地方公共団体や政府のアーカイブズに比べて、より多彩であることを示している。企業アーカイブズを真に価値あるものとするためには、まずひとつには、個々の組織の構造や機能、個性や企業文化を深く理解する柔軟な思考力が欠かせない。「アーカイブズのいのちであるデータベース」(畑田さん)にも、そういった企業組織と企業文化の深い理解に基づいた、資料の体系化と分類(＊)が必須である。それによって、アーカイブされた記録資料のコンテンツとコンテクストが、いまの人たちだけでなく後の人たちにとっても明確となり、データベース自体も利用しやすいものになるだろう。だからこそ、何度も畑田さんが繰り返し述べていたように、このアーカイブズの業務は、社外の人に頼んで行うものではなく、会社が自分事として取り組むべき仕事なのである。

＊ここでいう記録資料(アーカイブズ)の「体系化と分類」はアーカイブズ学でいう「編成と記述」の一部に相当する。本稿では分かりやすい言葉として「体系化と分類」という表現を使った。

彩色設計図(国登録有形文化財)
明治中期から大正期にかけ手掛けた設計施工作品の彩色が施された設計図面

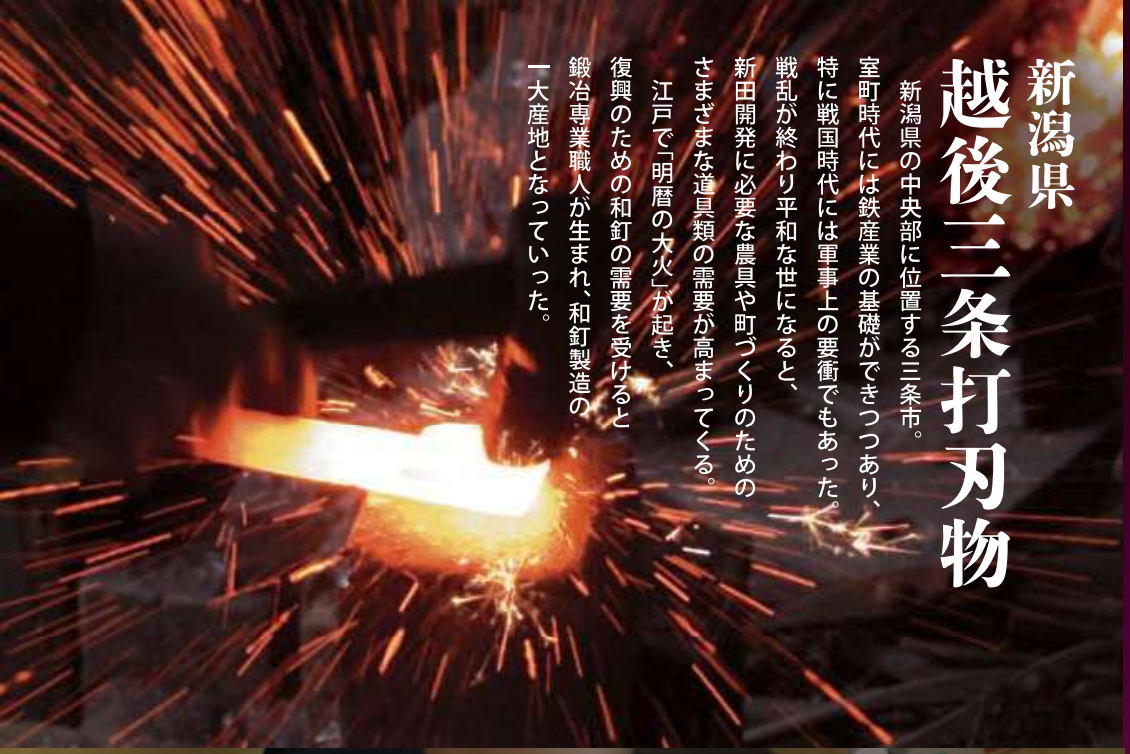


工事竣工記念帖
『白木屋改修工事落成記念』
(1933年 清水組)

松崎 裕子
アーカイブズ工房代表。2001年名古屋大学大学院国際開発研究科修了、博士(学術)。2008年より国際アーカイブズ評議会(ICA)ビジネス・アーカイブズ部会(SBA)運営委員、2012年より企業史料協議会理事。2017年よりISO(国際標準化機構)TC46(情報とドキュメンテーション)／アーカイブズ／記録管理に関する標準化委員会(SC11)委員。

逸品解題

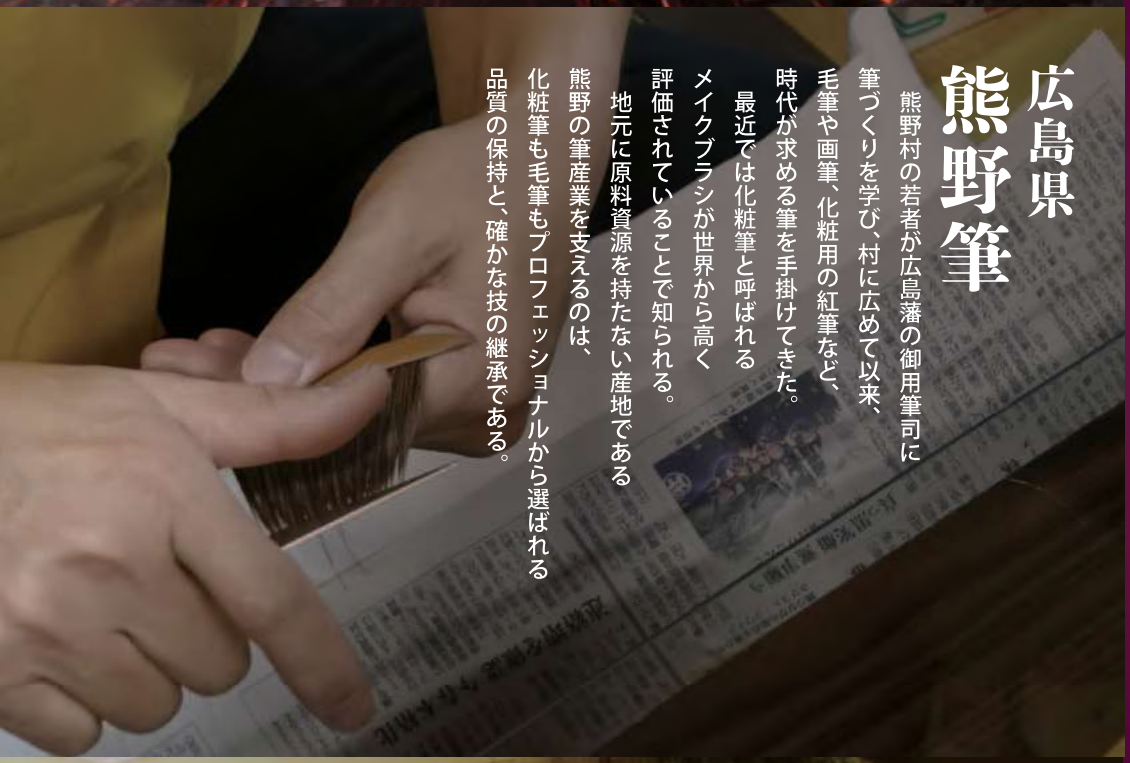
その土地で生まれ、
社会に根差し、発展してきた産業は
やがて地域を象徴する産地を形成。
ものづくりニッポンの礎を築いた逸品を通して
産地産業の現状をお届けする。



新潟県 越後三条打刃物

新潟県の中央部に位置する三条市。室町時代には鉄産業の基礎ができつつあり、特に戦国時代には軍事上の要衝でもあった。戦乱が終わり平和な世になると、新田開発に必要な農具や町づくりのためのさまざまな道具類の需要が高まってくる。

江戸で「明暦の大火」が起き、復興のための和釘の需要を受けると鍛冶専業職人が生まれ、和釘製造の一大産地となっていった。

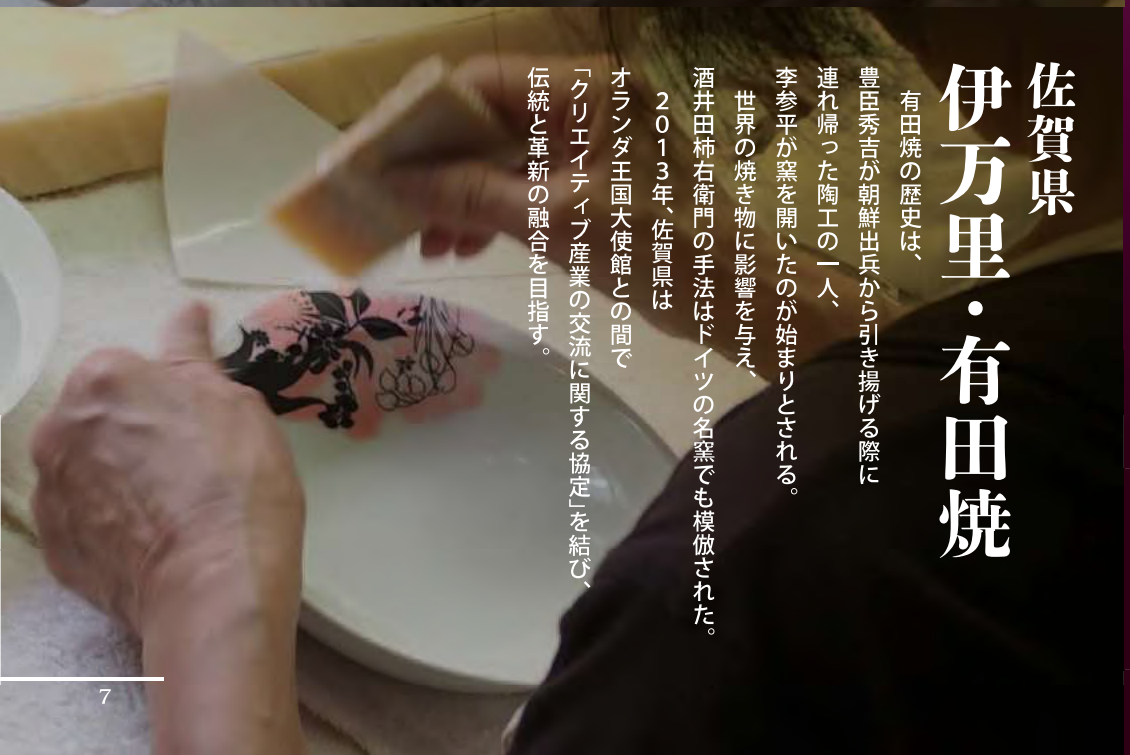


広島県 熊野筆

熊野村の若者が広島藩の御用筆司に筆づくりを学び、村に広めて以来、毛筆や画筆、化粧用の紅筆など、時代が求める筆を手掛けてきた。

最近では化粧筆と呼ばれるメイクブラシが世界から高く評価されていることで知られる。

地元に原料資源を持たない産地である熊野の筆産業を支えるのは、化粧筆も毛筆もプロフェッショナルから選ばれる品質の保持と、確かな技の継承である。



佐賀県 伊万里・有田焼

有田焼の歴史は、豊臣秀吉が朝鮮出兵から引き揚げる際に連れ帰った陶工の一人、李参平が窯を開いたのが始まりとされる。

世界の焼き物に影響を与え、酒井田柿右衛門の手法はドイツの名窯でも模倣された。

２０１３年、佐賀県はオランダ王国大使館との間で「クリエイティブ産業の交流に関する協定」を結び、伝統と革新の融合を目指す。

匠の技に宿る美意識、越後三条打刃物

越後三条打刃物の主な製品には、和釘、鉋、鉈、包丁、鉞、ヤットコ、切出小刀、鎌、木鋏、鑿がある。これら製品の木製部分などを除く本体は、材料づくりから仕上げまで一貫生産されている。熟練の技を必要とする何十もの工程は最初から最後まで、ひとりの職人による手作業だ。三条鍛冶道場の館長、長谷川晴生さんは「打刃物の中でも、着鋼といって普通の生鉄に鋼を貼り付ける技を持っています。これは日本刀にも見られる、特筆すべき日本的技です」と語る。

明治時代には鍛冶屋が353戸と急激な増加を見せる。洋鋼の普及により生産効率が上がり、この時代には日露戦争による軍需品の特別需要が増え、さらに1923（大正12）年の関東大震災後の復興事業により三条の名が関東一円に知られるようになった。近代化を迎えて刃物を科学的に研究する試みがなされ、それまで口伝えや勘が主流だった鍛冶の技に科学的な知識が加わる。三条鍛冶は伝統技術と先端科学の両輪をその技に内包することとなった。自由鍛造と呼ばれる高度な技術を駆使することに特徴があり、2009（平成21）年に経済産業大臣指定伝統的工芸品の産地指定を受けた。

三条市で鍛冶屋を営む小由製作所の小林由夫さんは、ヤットコや喰切といった日本独自の道具を得意とする、キャリア半世紀以上の職人である。

「私たちがつくる道具は『合わせ物』といい、丸い鉄の棒を鍛造し、2本で一対になる道具です。つくる工程でいちばん神経を使うのは、左右2本を合わせてから。先端がきちっと合うよう寸分の狂いなく仕上げるには、手の感触の確かさや経験が必要です」

また、小林さんは三条の和釘づくりを復活させた職人でもある。30年ほど前、伊勢神宮の式年遷宮に使う和釘の製作話が持ち込まれ、市内の3人の職人でさまざまなサイズの和釘約7万本をつくって納めたそうだ。「話を頂いた時点で遷宮まで3年しかありませんでした。和釘1本つくるのに3工程、全て手作業です。釘を打ち込んだ後の美しさまで計算して一本一本仕上げました。これは日本人の美的感覚でしょうね」（小林さん）

鍛冶職人として一人前になるには最低でも10年はかかるそうだが、長谷川さんと小林さんのふたりが口をそろえて「手先が器用で技術を身につければいいというものではない。感性やセンスが求められる仕事です」と話す。見えないところに使われる和釘の打ち込まれた後まで計算する細やかな感性は、2013（平成25）年の伊勢神宮の式年遷宮に使われた和釘づくりにも生かされ、13人の職人によって和釘約20万本、野鉄金具約8万本が納められた。

越後三条鍛冶集団
■新潟県三条市元町11-53
三条鍛冶道場内
■TEL:0256-34-8080
■http://kajidojo.com/

180年間培った技の確かさで世界中から熱い視線を注がれる熊野筆

熊野筆事業協同組合の荒滝芳彦さんに話を伺った。「城には文書を残すという現在の役所のような機能があり、かなりの量の筆を使うことから、城下町には必ず御用筆師がいたそうです」。ところが廃藩置県で城がなくなり、全国各地にいた筆職人がどんどん離職していく。そのような中、1877（明治10）年の第1回内国勧業博覧会で熊野の筆が入賞したことが転機となり、全国から注文が入るようになる。「盆地のため他の産業が入りにくいことや耕地面積が狭いこともあり、筆づくりの確固たる地位を築くという強い思いで、先人たちが切磋琢磨していまの形をつくったのです。ピーク時の昭和10年代には年間7千万本生産していたというデータが残っています」（荒滝さん）

熊野筆事業協同組合
■広島県安芸郡熊野町中溝3-13-19
■TEL:082-854-0074
■http://www.kumanofude.or.jp/

画像所蔵：筆の里工房

敗戦や教育制度の見直しなどさまざまな転換期を経て、昭和30年代に国内の化粧品会社から、化粧用ブラシをつくれないかという話が持ち込まれ、生産を始める。最初は町内でも「あれは筆ではなく刷毛だ」と言われていたが、化粧用ブラシに筆の技術を応用することに取り組み、化粧筆という表現を得た。その化粧筆もメイクブラシとして国内外のメイクアップ・アーティストたちから支持されるまでになり、熊野は筆産業において世界も認める産地となった。

筆づくりは、まず毛の選別作業から始まる。「筆は1本の中にいろいろな毛が入ることで、きれいな筆先ができます。同じ動物でも部位や季節、もっと言うと個体で違い、同じ毛は二つとありません。毛を見極め、選別していくのが筆職人の技です」と伝統工芸士の實森将城さんは話す。下仕事と呼ばれるこれら選毛や毛組みなど7工程を経て、台仕事、仕上げと続く。全て手仕事による丹念な作業で1本の毛筆が出来上がる。

「熊野自体が筆の産地として確たる地位を築くことができた要因のひとつに、職人の数が多いということがあります。筆はかなり特殊な製品で、好みや書く書体により必要とする筆が人によって全く異なるため、あらゆるニーズに応えられる職人の層の厚さが熊野筆の特徴といえます。この強みを失わないために、筆づくりの基礎を学んで企業に入ってもらうための研修制度を設け、後継者を育成しています」（荒滝さん）

熊野の筆産業は毛筆の生産量は減少傾向にあるものの、世界品質を誇る化粧筆という新たな分野を確立したことで産業の活性化へと導き、重要な観光資源にもなっている。

その歴史は400年 国内初の磁器、伊万里・有田焼

有田焼は、佐賀県の西部に位置する有田町とその周辺で製造される磁器のことを指す。国内で初めてつくられた磁器で、近くの伊万里の港から積み出されたために江戸時代は「伊万里」あるいは「伊万里焼」と呼ばれた。

酒井田柿右衛門が完成させた「色絵」は、釉薬の上に色彩を施す手法で、それまでの染付のみの単色から色鮮やかに変わった。さらに濁手（にごしで）と呼ばれる乳白色の素地に、余白を残した絵画的な構図に色彩を施した「柿右衛門様式」が流行する。その手法は、宮殿を飾るだけでなくドイツの名窯として知られるマイセン窯などで模倣された。その後も絵の具を贅沢に使った装飾性の高い「金襴手様式」が好まれ、博物館や城を飾っている。

しかし現在は贈答品としての需要が落ち込んだこともあり、有田焼は厳しい状況へと追い込まれていく。ピーク時の1990（平成2）年には164あった加盟社が現在では94に減り、高齢化と後継者不足も大きな課題である。

窯元である幸楽窯／徳永陶磁器株式会社の徳永隆信さんは「ものがない時代は必要に迫られて購入していた食器ですが、いまはそんな時代ではありません。これから売れるのはメモリアル。買うことによって思い出や記憶が一緒に残る。そういうものづくりをやっていくのが良いのではないかと思っているところです」と時代を見つめた取り組みを展開している。佐賀県陶磁器工業協同組合の百武龍太郎専務理事は「売り先を、海外を含めて保持し、開発する段階でまず流通の出口が出来ているというような商品が並んでいる企業が頑張っており、業界を牽引しています」と話す。

有田焼は、いま新たな挑戦を始めている。2013年、佐賀県はオランダ王国大使館との間で「クリエイティブ産業の交流に関する協定」を結んだ。世界各国16組のデザイナーと公募で決定した16の窯元と商社、そして佐賀県、有田町、オランダ王国大使館の連携による新ブランド2016/が始動した。世界各国のデザイナーが有田町を訪れ開発した商品のコンセプトは、日本のみならず、世界の新スタンダードだ。

時代の波を鮮やかにくぐり抜けてきた伊万里・有田焼の産地が再び世界に問うのは技術の確かさだけでなく、感性を含めたものづくりである。

佐賀県陶磁器工業協同組合
■佐賀県西松浦郡有田町外尾町丙1217番地
■TEL:0955-42-3164
■http://www.aritayaki.or.jp/

当館館長・研究員が学会研究会で報告

2017年4月23日に日本アーカイブズ学会2017年度大会自由論題研究発表会で、6月3日に記録管理学会2017年研究大会において、当館研究員の橋本陽がそれぞれ研究発表を行いました。4月の報告は、「ファイル・シリーズ生成の理念：大郷村役場『フォンド』編成の考察」と題し、欧米のモデルを日本の資料整理の現場にどう応用すべきかを論じました。6月の報告では、「中国第二歴史档案館のデジタルデータマネジメント―全宗原則に基づく大規模デジタル化計画の考察―」をタイトルに据え、同年2月に取材した中国第二歴史档案館の所蔵資料デジタル化事業について報告しました。

■日本アーカイブズ学会研究集会

また、11月17日、日本アーカイブズ学会・九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻主催の2017年度日本アーカイブズ学会第1回研究集会にて、当館館長の高津隆が講演を行いました。九州大学付属図書館を会場に行われたシンポジウムのテーマは「情報管理専門職をめぐる民間企業と大学・学界―記録情報管理の現状と研究教育・人材育成―」。企業の視点から「企業の記録と資料を守るために～出番を待つアーカイブズ専門家～」と題し報告しました。大学院で学んだアーキビストが企業の現場で求められる資質について、プレイヤーとプロデューサーという単語をキーワードに挙げながら、いくつかの提言を行いました。中でも、専門性のみに拘泥しない柔軟な発想力をもって社内外を問わずネットワークを広げつつ、資料の価値を再発見し提言していくという積極性こそが何よりも必要になってくることを指摘しました。その他、討論の時間では、大学院在籍中であっても、実際に企業で働く社会人と関わり豊富な経験を積むことの重要性に触れました。

■記録管理学会研究大会

特別企画展開催のご案内

産学連携特別企画 日本の会社展 第4回

地場"讃"業

―伝統と革新の軌跡―

In Praise of Local Industries

The Story of Tradition and Innovation

2018年3月21日（水・祝）より産学連携特別企画「日本の会社展第4回 地場"讃"業 ―伝統と革新の軌跡―」を開催します。
本展では、産地の「地」と「智」にスポットを当て、"讃"業と名付け、当館にとって初となる産学連携プロジェクトで企画を進めてきました。
全国47都道府県、約700産地を対象に、地場産業に造詣の深い研究者と経済・経営・歴史・地理学等を学ぶ学生、そして帝国データバンク史料館による研究成果をパネルやデジタルメディアで展示します。
詳しい情報については、随時ホームページでお知らせします。

帝国データバンク史料館だより《Muse Vol.31》2018年2月発行　©帝国データバンク史料館

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM
Muse
2018.2 Vol.31

帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3　TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

［入 館 料］　無料
［開館時間］　10:00～16:30（入館は16:00まで）
［休 館 日］　土・日・月曜日および祝日、年末年始
（その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。）

交通のご案内

［ＪＲご利用］	中央線・総武線 市ケ谷駅	徒歩8分
	中央線 四ツ谷駅	四ツ谷口から徒歩9分
［地下鉄ご利用］	南北線・有楽町線 市ケ谷駅	7番出口から徒歩6分
	都営新宿線 曙橋駅	A4番出口から徒歩9分
	丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅	2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp